

## 子育て支援における祖父母世代のかかわりに関する研究 —実践で学ぶ「まちの寺子屋師範塾」の事例から—

### Study on Child Rearing with Grand Parents: Practice of “Machi no Terakoya Shihanjuku”

横川 和章\* 名須川 知子\* 大西 もよ\*\*  
YOKOGAWA Kazuaki NASUKAWA Tomoko ONISHI Moyo

本研究は、2008年度から2012年度まで兵庫教育大学で実施された「まちの寺子屋師範塾」を事例として取り上げ、参加した祖父母世代にどのような意味を持っていたかを検討し、子どもをめぐる祖父母世代をつなぐ地域子育て支援のあり方について示唆を得ようとするものであった。講座の観察記録や受講者へのアンケート及びインタビューを分析することで、受講した祖父母世代は、観察や実践を通して、さらには、受講者同士の意見交換を通して、子育てに対する考えや子育て支援に対する理解を深め、この学びを地域の子育て支援活動に生かしていきたいという思いを強く抱いていることが明らかになった。「実践で学ぶ子育て支援」という本講座は、観察、実践、振り返りという3つの要素を含む世代間の交流を中心とするものであった。この世代間交流は、祖父母世代にとっても、子どもや子育て世代にとっても、参加する多世代に意味のある互恵的な交流となっており、具体的な事柄を通して、子どもに対する気付き、子育て世代に対する気付き、さらには、子育てを支援することに対する気付きなど祖父母世代に多くの気付きをもたらすものであった。これらのことから、祖父母世代を地域の子育て支援活動につなげていくために、きっかけとなる場の必要性と祖父母世代をつなぐ役割の重要性が示唆され、その上で、かかわりを継続していくことが課題として指摘された。

キーワード：子育て支援、祖父母世代、まちの寺子屋師範塾、世代間交流、実践での学び

Key words : child rearing, grand parents, “Machi no Terakoya Shihanjuku”, intergenerational programs, learning on practice

#### 1. 問題と目的

わが国では、2015年度開始を目指して新たな子育て支援施策の展開を推進しようとしている。これは、幼保一体化としての認定こども園推進を含めた就学前の子どもの育ちを保障する制度設計の実現の一步ともいえるものである。現代社会では、少子高齢化と共に、女性の社会進出、核家族化、地域における人間関係の希薄化等、子どもをめぐる環境が激変している。そして、近年の子どもの育ちについては、基本的な生活習慣や態度が身に付いていない、運動能力が低下している、他者とのかかわりが苦手である、自制心や規範意識が十分育っていないなどの課題が指摘されている。また、乳幼児の成長・発達にとって大切な、集団の中で同年齢児あるいは異年齢児と共に育つ体験を十分に得ることが困難な状況となっているほか、保護者の子育てが孤立し、子育てに不安や負担を感じる親が増加しているのが現状であり、健全な子どもの育ちとしては多くの者が危機感を抱いている。

そのような中で、わが国における社会全体で子育てを支える基本的な支援施策としては、「子ども・子育てビジョン」(2010)にみられ、多くの地方自治体や就学前教育機関で実施されている。それは成果をあげているも

の、各地域の子育て支援事業の多くは、依然として直接子どもを養育している母親だけを対象とし、多世代交流を目指した支援はまだ少ない。しかし、兵庫県では、2008年度から県内の複数の大学と連携した「まちの寺子屋師範塾」を開講した。この祖父母世代の子育て支援を対象とした事業は2012年度まで継続され、地域子育て支援拠点の機能強化としての世代間交流がみられた。

このような子育て支援の方法は、身近な地域の子どもたちとのかかわりを通して周囲の大人が子育てに参加することで、多世代における子育ての力を形成することにつながり、地域コミュニティを醸成していくのではないだろうか。

祖父母世代の子育て支援に関して樋口(2006)は、「血縁の孫の有無にかかわらず高齢世代が社会参加し何らかの貢献をし、世代交流を進める必要がある」とし「社会的祖母力、祖父力の発揮」を示唆している。しかし、祖父母世代を対象とした子育て支援の研究は、まだ多くはなされていない。田淵(2008)が行った女性を対象とした調査では、子育て支援の活動の開始動機は「一般的活動動機」として「知人からの勧誘」が、「子育て支援特殊動機」としては「子どもが好き」が最も多いこ

\*兵庫教育大学大学院人間発達教育専攻幼年教育コース \*\*わらべうたグループ「どんぐり」

平成26年10月31日受理

とが明らかにされた。また、継続動機を「自己へのメリット」「他者への貢献」「人間関係の充実感」「活動自体の良さ」に分類し、そのうち「他者への貢献」としての「親世代への貢献」と、「活動自体の良さ」としての「活動自体の楽しみ」が最も多かったことも報告している。名須川ら（2011）は、兵庫県内の祖父母世代の子育て支援に対する意識を調査し、「きっかけがあれば、親族以外の子育てもしたい」と思っている、実際にはそのような支援事業にはあまり参加できていないことも明らかとなり、場の共有についての課題があることを示している。

また、北村（2008）は、「参加してもよいと思う子育て支援の種類」という質問によって、祖父母世代の子育て支援に関する男女の意識の違いを明らかにしている。男性は「遊び相手」「関連行事・施設の手伝い」に関心が高く、女性は「親の相談相手」「絵本・児童書の読み聞かせ」に関心が高い。ここでも、男性は支援の対象として「子ども」を考え、女性は「親」「子ども」の双方を対象としている。名須川ら（2013）によると、子どもが好きであることを前提として、男女で意見が異なり、女性では現在の母親の支援を願い、その背景として子育てのやり直しをしたいという思いが垣間見られ、男性では、社会貢献として、生きがいとしての子育て支援を考えていることが示されており、背後にあるジェンダー意識の固定化・再生産ではなく、そのことを踏まえたきめ細かい祖父母世代の子育て支援のあり方も考慮する必要性が明らかとなった。

さらに、子育て支援の具体的な提案をとおして、大西（2013）は、支援内容として、わらべうたを中心とした子育て支援の意味について言及し、祖父母世代が「自分自身の背景により、今子育て中の親世代へ何らかの助けを行いたいと思っている」一方、「子育て中の親子世代を学ぶ」必要性も感じていることを指摘している。

以上のように、祖父母世代を対象とした調査報告はみられるが、具体的内容や実践については、わずかに溝邊・吉津（2014）によるネイチャーゲームをとおした世代間交流に見られる研究以外にほとんどみられない。しかし、いずれも子育て中の保護者と祖父母世代の互恵性についての課題が残されている。

そこで本研究では、地域における未就園の親子が集う幼稚園の子育てひろばに「まちの寺子屋師範塾」の祖父母世代が参加するという子育て支援の事例の検討を通して、少子高齢化におけるこれからの子育て支援として、世代間の双方向的、互恵性をもったあり方について示唆を得ることを目的とする。

## 2. 方法

祖父母世代の子育て支援について検討するために、

2008年度から2012年度まで兵庫教育大学で実施された「まちの寺子屋師範塾」を事例として取り上げ、受講者である祖父母世代に対するアンケート、講座の実際の観察と受講者へのインタビュー、及び、子育てひろばに参加した子育て世代へのアンケートを行った。

## 3. 「まちの寺子屋師範塾」の概要とその評価 本学の講座の特色

本学における「まちの寺子屋師範塾」は、「実践で学ぶ子育て支援」というテーマの講座である。その開設の趣旨は、兵庫教育大学附属幼稚園で行われている未就園児への園庭開放である「子育てひろば」に参加し、親子の様子や乳幼児の実態を踏まえた講師からの解説や、受講者による実践、討論等を通して、子育て支援に必要な知識や方法を学ぶというものである。

「まちの寺子屋師範塾」は兵庫県下の多くの大学が参加しており、各大学それぞれの講座内容で実施されているものである。本学で実施した講座は、以下の2点の特徴を持っている。ひとつは、受講者の募集に際して年齢制限を設け、子育て家庭の祖父母世代に相当する50歳以上の人限定して受講者を募ったことである。これは、地域の子育て支援に対して、祖父母世代の参加意欲を高め、活動を促していくことを意図した講座として実施したためであった。もうひとつは、実践を重視している点である。他大学で実施された講座は、その多くが、子育て支援に必要な理論、知識、技能を講義形式で学ぶものであるのに対し、本学の講座は、「実践で学ぶ子育て支援」としている通り、実際に子どものいる場に参加し、子どもとかわる実践を通して学ぶことに重点をおいた講座であった。

### 実施状況

2008年度から2012年度まで5年間にわたり実施した。募集定員は10名（50歳以上、2008年度と2009年度は55歳以上）であった。各年度の受講者数と受講者の内訳は表1の通りである。50歳代とそれ以上が約半数ずつで、女性が多いが、男性の受講者も含まれていた。

### 講座内容

各年度とも、大学教員である園長が講師となり、附属

表1 各年度の受講者数とその内訳

	受講者	年齢			性	
		50歳代	60歳代	70歳代	女性	男性
2008年度	10	1	6	3	8	2
2009年度	7	4	2	1	7	1
2010年度	8	5	2	1	7	1
2011年度	6	6	0	0	6	0
2012年度	2	1	1	0	0	2
合計	33	17	11	5	28	6

数値は人数

幼稚園の協力を得て、講座を行った。講座内容は、未就園児親子の来園する「子育てひろば」の観察、未就園児親子との遊びの実践、附属幼稚園のうれしのタイムでの遊びの実践、受講者による討議と講師による講義、教材開発の活動などである。

講座は、初年度（2008年度）は4日間の日程で行い、2009年度、2010年度は5日間、2011年度、2012年度は6日間と、4日間から6日間の日程で実施した。9月または10月に講座開始の第1回を行い、月に1～2回の頻度で実施し、12月に講座が終了することとなっていた。講座日程は年度によって異なっているが、附属幼稚園の「子育てひろば」に参加し、実践を通して学んでいくという基本的な講座の内容は、すべての年度に共通していた。年度によって日程が異なっているのは、受講者の感想や意見を取り入れ、教材開発のための活動時間を確保することと、受講者による討議や講師による解説の時間を十分に取ることにし、実践からの学びををより充実したものに改善していったためである。

**講座に対する受講者の評価**

2009年度～2011年度にかけては講座終了時に、講座内容に関する評価のためのアンケートを実施した。この結果によると、多くの受講者が、講座は受講の動機に沿うものであり、興味をひく指導が受けられ、期待通りのものであったと回答している（表2～表4）。このように、受講者からの講座の評価は高く、満足のいくものであったと考えられる。

このアンケートでは、「講座を受けて、今後地域での子育て支援活動に参加したいと思ったか」との質問もあわせて行っている。この質問に対しては、約9割の受講者が、そのような意欲を強く持っているとして回答していた（表5）。本講座の受講者の多くは、もともと受講に際してそのような気持ちを少なからず持っていたと思われるが、講座を受講することで、その意欲はより確かなものになったと思われる。

**受講者の気付きや思い**

アンケートの最後には、印象に残ったことや感じたことを自由に記述してもらっている。毎回の講座の中で行われた受講者による意見交換においても、様々な気付きや思いが表現されていたが、ここでは受講後のアンケートの自由記述から、受講者の気付きや思いがどのようなものであったのかについて整理することとした。

まず、本講座が実践を通した講座であったことに対する感想があげられていた。その多くは、実践を通した講座であることの意義を感じていたものである。

「園のカリキュラムに組み込まれていて、巾と深みのある取り組みだと思いました。実践を通した取り組みだったので、今後大いに役立ちます」（2009年度）

**表2 講座の内容は受講の動機にあっていたか**

	2009年度	2010年度	2011年度	合計
全くそう思う	3	0	2	5
そう思う	3	7	4	14
どちらともいえない	1	0	0	1
そう思わない	0	1	0	1
全くそう思わない	0	0	0	0
	7	8	6	21

数値は人数

**表3 講義や指導は興味をひくものであったか**

	2009年度	2010年度	2011年度	合計
全くそう思う	3	4	3	10
そう思う	4	3	3	10
どちらともいえない	0	1	0	1
そう思わない	0	0	0	0
全くそう思わない	0	0	0	0
	7	8	6	21

数値は人数

**表4 講座全体の評価は期待通りだったか**

	2009年度	2010年度	2011年度	合計
全くそう思う	3	3	4	10
そう思う	4	2	2	8
どちらともいえない	0	3	0	3
そう思わない	0	0	0	0
全くそう思わない	0	0	0	0
	7	8	6	21

数値は人数

**表5 地域子育て支援活動への参加意思**

	2009年度	2010年度	2011年度	合計
全くそう思う	6	7	6	19
そう思う	0	0	0	0
どちらともいえない	1	1	0	2
そう思わない	0	0	0	0
全くそう思わない	0	0	0	0
	7	8	6	21

数値は人数

「皆様いい人ばかりで、意見交換したり、物を作ったり、子どもの目線に立っていろいろなことを体験させてもらいました」（2009年度）

「自分のイメージしていた講座とはかなり違っていましたが、多くのお母さんや子どもさんと触れ合えて、とても有意義でした」（2010年度）

「実践的であったので、とても楽しめました。難しいことを考えるより、子ども達とふれあいながらできるのが良かったと思います」（2011年度）

「実践をそなえた師範塾を体験することができ、とても有意義でした。実践に対しての話し合いもでき、ありがたかったと思います」（2011年度）

その中で出会った具体的な子どもの姿や親の姿からの気づきも多く記述されている。

「5～6人が遊んでいても、後片付けがきちんとどの子どものグループもされていることに感心しました。小さい子どもがもてない物は、大きい子どもが支えてやる思いやりの心に感心しました」(2009年度)

「恵まれた環境で、子ども達がのびのび過ごされているので、きっと楽しい思い出がたくさんできるだろうなと思いました。小さければ小さいほど、ゆったりと時間をとってあげることが必要だと感じました」(2010年度)

「子どもに接して、表現ひとつを見ても個性にあふれていて逆に教えられた。保護者に接して、親子一体になり、子どもの目線に立って、動作や行動をしているのに心を動かされた」(2010年度)

「幼稚園の先生だけに任せるのではなく、クラスの保護者の方が参加されているのがよかったです」(2010年度)

「竹トンボを子どもたちがあんなに喜ぶとは思いませんでした」(2010年度)

同時に、実際の幼稚園の保育や教師の子どもたちへのかかわりを見ることで気付く部分もあったようである。

「先生方の熱心な子ども達に対する接し方にも感心しました」(2009年度)

「実際の現場を見せていただいて、日々工夫されているなと思いました」(2010年度)

「子どもは何にでも興味を持ち、何でもしてみたいものです。その場を提供し、見守り、ときには注意し、指導するのが理想だと思います。この幼稚園がいいなといつも思っていました」(2010年度)

「子ども達がいきいきと遊んでいる姿が印象的でした。先生方の笑顔もいいですね」(2010年度)

子ども達のいる場に参加し、子ども達や子育て中の親とふれあうことで自分自身も楽しさや喜びを感じたという思いもいろいろな形で示されている。

「教材作りが子どもにあわせてできたことが役に立った。市販されているものではなく、リサイクルできるもの(素材)を使って作る。第4回の紙トンボ、ブンブンゴマ、第5回の紙トンボ作りでは、子ども達の描いた紙トンボが飛んだときのうれしそうな笑顔は、私の心の宝物になりました」(2010年度)

「子ども達の笑顔、お母さんの笑顔、先生の笑顔、笑顔があふれている中に自分も笑顔になり、とても大きな喜びでした」(2010年度)

「幼稚園で子ども達が元気にいろいろな遊びをしているのに触れられて楽しかった。稲刈りや脱穀など、子ども達と一緒に体験できたのもいい経験だった」(2010年度)

「若いお母さん方と交流できてうれしかったです。子ども達のパワーをもらいました」(2011年度)

講座での実践を通して、ふれあいの大切さを感じたり、祖父母世代の立場で子育てを支援していくことの意味を捉えている記述もなされていた。

「いろいろな場面での子育てひろばに参加させていただき、幼児と未就園児とのふれあいの様子、親子のふれあいの様子等を見させていただき、ふれあいの大切さをつかめたような

気がします」(2009年度)

「地域の子育て支援を考えるときに、支援する側に専門的な知識や資格を期待してしまいがちですが、今回の実践的な講座を受けて、そのことはそんなに大事ではなく、子どもが好きな人であれば誰にでもできることではないかなと思いました。そのように思えたのも、こちらから声をかけたり、話をして積極的に親子とかかわり、遊びのコーナーで一緒に竹トンボやブンブンゴマを作ることを体験したからだと思います」(2009年度)

「親から子、子から孫にと、教え伝えると言う大切なポジションに今自分たちがいることに気づき、子どもさんからたくさんのエネルギーをもらいました」(2009年度)

また、講座が仲間づくりにもなっているという記述もされていた。

「メンバーの人柄もよく、閉講後も連絡を取り合って、会っておしゃべりをしたり情報交換をできる友を得られたことをうれしく思っています」(2009年度)

以上のような様々な気づきや思いを通して、子育て支援にかかわっていかうという意欲やこれからの学びについて、あらためて表現している記述も多く見られている。

「今後地域での子育て支援活動に少しでもお役に立てればと思っています」(2009年度)

「子育て支援にここで体験したことを生かしていきたいと思えます」(2010年度)

「おもちゃ作り、わらべうたなど、今後の活動の参考になることも覚えることができました。これからも地域で楽しく元気に活動し、少しでもお母さんの子育てを応援できたらと思っています」(2010年度)

「孫にとって、よき祖母となれるよう、これからもいろいろな機会に学んでいきたいと考えています」(2010年度)

「とても勉強になり、一緒にチームを組むメンバーもよい方々で気持ちのよい活動でした。これからも活動を続けたいと思えます」(2011年度)

「先生方も親切、丁寧で、受講してよかったです。一緒に受講した方々も親切でしっかりした方ばかりなので、もっと講座を受けて、子育て支援に参加しようという意欲がわきました」(2011年度)

以上のように、受講者は、講座を肯定的に受け止め、今後につながる活動への思いを強くしていたことが明らかになった。次節では、講座の中で行われている具体的な実際に基づき、より詳細に検討を加えていく。

#### 4. 「まちの寺子屋師範塾」の実際

ここでは、講座の中で実際に行われたことが受講者にどのように受け取られ、本講座が受講者にとってどのような意味を持っていたかについてより詳細に検討する。2011年度及び2012年度の講座を対象とし、講座の実際についての観察記録と受講後に行ったインタビューに基づき分析した。<sup>1)</sup>

2011年度及び2012年度の講座内容は表6の通りであった。いずれの年度でも講座の中では、受講者による「子育てひろば」の観察、未就園児親子との遊びの実践や幼

表6 講座内容

2011年度 内容	
第1回	オリエンテーション、観察、話し合い
第2回	観察、自己紹介、教材研究、話し合い
第3回	遊びの実践（わらべうた遊び）、話し合い
第4回	教材研究、話し合い
第5回	教材準備、話し合い
第6回	コーナー遊びの実践（制作遊び）、話し合い
2012年度 内容	
第1回	オリエンテーション、観察、自己紹介、話し合い
第2回	観察、話し合い
第3回	教材研究、話し合い
第4回	遊びの実践（わらべうた遊び）、話し合い
第5回	教材研究・準備、話し合い
第6回	コーナー遊びの実践（制作遊び）、話し合い

稚園でのコーナー遊びの実践、そして、それらによって気付いたことの話し合い（意見交換と講師による講義や振り返り）が行われている。

**観察記録から**

観察記録から、「子育てひろば」の観察、わらべうた遊びの実践、制作遊びの実践に関する事例を取り上げて分析する。

**（1）「子育てひろば」の観察**

**事例1（2011年度第1回 観察後の話し合い）**

観察中に出会った子どもの様子が受講者から語られた。在園児がタイヤを片づける時、たくさん持っていたので手を貸そうとしたが、うまく片付けたことに感心した。しかし、力任せにタイヤを入れた後、偶然に、積み方によってタイヤが弾むことに気が付いて試しながら遊び始め、今度はなかなか部屋に戻らないので心配になった。

このときその場に居合わせた講師が、在園児に対して、自分の力で全部片付けられたことと、そのタイヤの上を歩いて帰ろうとするときに置き方によって弾むことに気付いたこと、そのどちらをも受け入れることによって、在園児は片付けを終えて帰っていった。それを見た受講者は驚き、事後の話し合いで取り上げたものである。ここでは、子どもにとって、タイヤを片づけることと弾むことに気づくことの両面に意味があり、それを周囲の大人がくみ取ることの大切さが述べられ、受講者達は、自分たちの子育てへの振り返りにつながった。このような振り返りは受講中に繰り返された。

**事例2（2011年度第1回 観察後の話し合い）**

受講者達から、「子育てひろば」の好きな遊びの時間に在園児や未就園児親子が、園庭のいたるところで遊ぶ様子を見て、子どもが「かわいい」と素直な感想が述べられた。また、遊戯室でのプログラムで、在園児と一緒に遊ぶ未就園児の様子もかわいく、お母さん

と一緒に楽しそうだったとの感想も述べられた。

受講者が子どものかわいさを受けとったこの事例から、講師から「子育て支援」についての説明がなされた。子どもが親子でのびのびと遊んでいるのは、幼稚園型の「子育て支援」であり、親子で遊ぶことを中心として「親育て・子育て」を目標にしているからである。また、附属幼稚園の「子育てひろば」は、親子で好きな遊びで遊んだ後、幼稚園のプログラムによる親子での楽しみを提供し、親が責任を持って子育てを手伝うために行っていることも述べられた。これにより、親子の姿に納得し、親育てという観点から見ようとする受講者の様子がうかがえるようになった。

**事例3（2012年度第2回 観察後の話し合い）**

園庭の隅で板切れに足をかけて全体を見ていたとき、在園児に「そこは台所の椅子だから、足はダメ」と叱られたというエピソードが受講者から紹介された。そして、「ごめんね」と謝ると、座らせられ、用意したご飯が出された。子ども視線でないことを反省しつつ、おいしくいただくしかなかったことを語った。

受講者が、子どもの展開する遊びの中にいなかったことを反省し、子どもの側から提示された子どもと共に遊ぶ場を体験することができたエピソードである。講師からはこのことに対して、まず、受講者と在園児双方に良い経験であったことが述べられた。そして、幼稚園は子ども達が主体性を学ぶところであり、学びの中身は実体験を通して得られ、自由度の高い遊びの中に学びの場があることが述べられた。子どもは遊びの中で主体的に学んでいくという「遊びの中の学び」について考えさせられるものであり、これまでの受講者自身の自らの仕事の中で感じたこととの関連を想起させるものとなった。

**事例4（2012年度第2回 観察後の話し合い）**

「お父さんが来られていたが、顔が固く笑顔がない。祖父世代は一度子育てを経験してきたので、流れの中での考え方、捉え方が違うと思うが、せっかく父親で来ているのだから、男同士で誘ってきてもいいのではないか。それこそ子育てなのではないか」との意見が受講者から語られた。

この話を受けて、講師から、保護者としての参加が、母親任せから変わってきていることを肯定しつつ、父母の違いもあるのではないかと考えが示された。父親は、母親同士のようによくわからないままに来て何かをするということは苦手で、すべきことを伝え、役割が明確である方が参加してもらいやすいのではないかと述べられた。そこで、父親ならではの、父親を参加させるようなプログラム作りをし、連携を図っている本学附属学校園の「おやじの会」の活動についての紹介がなされた。これは、子育てに関わることに失敗してきたという思いが

あるからこそ今の父親世代に言えるものがあるという、受講者の気持ちにつながっていくものであった。

(2) わらべうた遊び実践

事例5 (2011年度第3回 わらべうた遊び実践)

受講者たちは、まるで子どもの頃のように、仲間として楽しそうに嬉しそうに遊び、参加親子がみんな笑顔で一緒に遊んだ。最後、円になると子どもたちは円の中を走り回ったり、思い思いに飛び跳ねたりする。それを見て、参加者みんなが笑顔になった。

わらべうた遊びの終了後、講師より、参加していた親世代や受講者に向けて、「わらべうた遊び」は、誰でも簡単にできる伝承遊びであり、歌いながら動くことで、子どもたちはどんどん嬉しくなってくるということ、さらに、0歳～2歳は動くことが考えることであり、動きながら育っており、今日の0歳～2歳の未就園児に合った遊びであったということが解説された。

この経験は、受講者と未就園児親子双方にとって「わらべうた遊び」の楽しさを、また、受講者にとっては未就園児親世代とのかかわり方を示すものとなった。さらに終了後、受講者に駆け寄って来た「子育てひろば」のスタッフとして参加していた在園児の母親から「元気もらいました」と弾んだ声の言葉かけがあった。これらを共有することで、未就園児親子と遊ぶことができるという受講者達の自信へとつながったと思われる。

事例6 (2012年度第4回 実践後の話し合い)

「保護者として幼稚園の集まりに参加することはあっても、幼稚園で提供する側に立つことはないと思っていた。貴重な経験だった。どうなることかと思ったが、お母さんや子どもと一緒に参加することができて楽しかった。やる方が楽しくないと、参加した人も楽しくない」や「未就園児の親子の前に立って何かを提供するようなことは経験したことがない。今までの、孫たちからの経験上、泣かれたらどうしようかと思ったがそのようなことはなく、場の雰囲気がよく、自信が持てた」というように、立場の逆転による新しい経験をすることによって、親子世代と遊ぶ楽しみや自信が得られたことが語られた。しかし、2012年度第1回から気にしていた参加できていない「お父さん」の存在に気が付いていたが、何も手立てができなかったことが反省としてあげられた。

講師からは、大人は気持ちが入ってなくてもできるが、子どもは楽しいと思えたときに集まってくること、楽しいことができるという経験が、親子世代、祖父母世代、双方に必要であることが述べられた。参加できなかった「お父さん」に対しては、振り返った今なら役割を作ることができた場面を考えられるが、実践時にはできなかったことを認め、これからの活動に生かしていくことが話された。受講者は、親世代の時に「子育てに協力するお父さん」を自分たちが経験してこなかったことを自覚しつつ、次の実践の準備に取り掛かった。



写真1 わらべうた遊び (2011年度)



写真2 わらべうた遊び (2012年度)

(3) 制作遊び実践

事例7 (2011年度第6回 制作遊び実践)

ストロー飛行機では、飛ばす面白さよりも作ることに重点を置き、自分の飛行機を作ったり、いくつも作っていくうちに簡単な作り方を発見したりしている。新聞遊びでも、用意したものに好きなものを描いたり付けたりなど思うように遊んでいる。このような在園児の姿を受講者は興味深く見守った。こうした姿を見ることによって、さらに受講者の活動に熱が入り、子ども達が作りやすいように材料を整えていった。

最初に提供したストロー飛行機とは全く違うものを作り始める子ども達の様子を、受講者は、その発想の豊かさに驚きつつも、ゆったりと受け入れ、どのようなものができるか一緒に楽しむことができた。他の制作遊びでも、受講者が予想しなかった遊びが出てきたが、それに応じるために、メンバー間で材料の交換をしたり、場所の確保をしたり、子どもと共に遊ぶことができる空間にしようと思った。実践終了後の話し合いでは、受講者が考え準備した遊びが、未就園児親子と在園児とに自由に受け入れられ広がり、共に遊び合うことができた喜びが話された。これに対して、講師からは、子どもへのかかわり方に対する評価と、この講座での経験を生かした活動をしてほしいという次につながる方向性が示された。

事例8 (2012年度第6回 実践後の話し合い)

「露天商ならすごく儲かるだろうというくらい押し寄せてきて、未就園児と在園児がわからなくなった。人がやっていると見つけたみんながほしがり、材料の紙コップにかなり穴をあけた。動きのあるものは喜んでくれ、後から来る方がヒートアップして本気であった。一人面白い子がいて要求がどんどん増えていった。時間差ができて待つことや順番を守ることができる年長児の成長に驚き、未就園児からの発達の差がよくわかり実感できた」や「腰が痛かったし、汗もかいた。子どものパワーがすごく、自分たちでどんどんやってくる。大人なら一度集めて説明すればそれで済むが、子どもはそうはいかず、一人一人につきあう。工夫する子がいてストロー2本並べて飛ばし、その発想力に驚いた。それを見て作ってくれという子もあり、こんな体験はここにないとできない。ストローであれだけ遊べるとは思わなかった」との感想が語られた。

受講者は、子ども達が持つパワーや子どもは一人一人違うことに気付き、子ども達それぞれが自分のやりたいと思ったことがあるからこそ成長していくことの驚きを語っている。受講者は、子ども達それぞれの要求に応じるといふことでしかできない経験をしながら、年長児の姿にその成長を実感していたと考えられる。講師より、遊びを計画してきたことによって、子どもを理解し共に遊ぶことの楽しさを実感する経験ができたことを評価し、この経験の価値と、これからの子育て支援活動につながっていくことについての祖父母世代への期待が述べられた。



写真3 制作遊び (2011年度)



写真4 制作遊び (2012年度)

受講終了後のインタビューから

観察記録から見られたように、受講者は、祖父母世代として在園児や未就園児親子と触れ合い、意見交換や振り返りによりその姿を学んでいくことで、子どもが育つことや親子がかかわること、そしてそれらを支援することをメンバーと共に実感していったと考えられる。それぞれが講座を受講する背景や深まっていた子育て支援への思いが、講座終了後にインタビューをすることによってさらに明確になった。

インタビューでは、子育て支援者講座を受講したきっかけとして、開講時の話し合いでそれぞれが話したことが再び語られている。

「5人も孫に囲まれることになるし、親達を見てるわけですから、彼らに何をやってもらいたいのか。(中略) やっぱりその子たちを、子ども達が、ほくの子ども達がどうやって育てていくのか、働きながら育ててるのがおもしろい。やっぱり大変なんだろうなと」(2012年度)

「いろんないきさつがあったから、いまのちっちゃい子どものお母さんと、冷静に自分がある程度年取ったときに、自分の子育ての時期は必死やったから思わへんかったけど振り返ったときに、子どもがちゃんとお母さんに甘えてるんかな、お母さんがちゃんと受け止めてんのかなってそういうのをちょっと見たかって」(2011年度)

このように、受講の直接的なきっかけとしては、実際の孫ができた、祖父母世代として親子世代を見たり、祖父母世代として親子世代とかわることになったというように自らが祖父母世代になったことによるものである。さらに、それだけにとどまらず、自分の子ども時代のことを振り返ったり、自分の行ってきた子育てについて振り返ったりということがなされていた。こうした自分の子ども時代や自分の子育ての振り返りの中に、受講の背景となっているそれぞれの思いやこだわりが表されている。

「(略) (子どもの頃) あの子とつきおうたらあかんとか、そういうの、ちょっと昔のね、こだわりの母やったから (中略) すっごい葛藤があったんや。それからね、母親にはええ経験させてもうたと思うよ。今でもね。今なってから」(2011年度)

「(子どもに) ごめんなっていうたもん。ほんまそやもん。だから、お父さん、お母さん、おばあちゃん皆がもっと心が広いというか、余裕を持って子育てしてたら、そんななっとなかったと。だから、あの、あの人みたいにいい子育てできてたんやけど、してないということはそうでしょ」(2011年度)

自身の子ども時代や行ってきた子育てを振り返る中で、自分にできることは何かを模索していた。この自分にできることの模索は、まさに、祖父母世代として振り返った自らの背景の中の経験から出た、本当に必要とされるものを実践していきたいという思いそのものであり、このことが子育て支援活動へとつながっているのである。

「ぼくは、何回も言っているように、こりゃ子どもも大人も一緒や。人っちゅうのは、嫌なことはやらんし、ま、楽しいと思うから夢中になってくれるし、仕事もそれで成果が出る。仕事の世界では、そういうことは自分でも気が付いておったんやけど、やっぱ、子どもも一緒やね。なんかそういうつながりみたいなもん、少しできたんで、これから子育てだけじゃなくて、ものづくりの世界に戻っても、その経験は生きると。絶対にそれは間違いないと、その確信は持ってたんですけどね」(2012年度)

「残された子たちに、次の世代の子らに、やっぱり、考えて何かいうもんだだけ、与えておいてあげんと、自分らだけほったらかしいうことでけへんでしょ。そういうもの、思ってる世代に入った人間が、自分のできる範囲内でええから、やりやあええし、こうやって(講座に)来てんのもそうやし」(2012年度)

さらに、受講したことによって生まれてきた、子育て支援活動を実践する楽しさ、子どもの姿への気付き、そしてメンバーと出会えたことの喜びなどが話されている。

「あれも面白いですよ。なんか性格というか、じーっと子どもの、あの友達(作っている)みとって、ちょっとしてからぼくもしょうかな?って後からね来た子やらとか、そいで…。ね、慎重な子やら、ずーっとどれもこれもどれもこれもいう子もあるし。そうや、もうこれしとおやんでいう感じなんやけど、またするみたいなお子。ほんまに、面白い子」(2011年度)

「だからすごい、みんなとね会おうっていうのは、ちゃんとこう回ってきてんねんやって思っただけ、それはすごい感じた。もう、全然ばらばらのところから、ようこんだけねえ。50って書いてある、50になってこんな嬉しいことないわ。いくら長いことおったとしても、かかわれてるかどうかいいたら、全部が全部、かかわれてないからね。よかったねえ。こんだけみんな似たもんがねって、おとうさんにいうてね。今まで遠回りになってきて、そんな意味があったんやなって」(2011年度)

受講者は、母親や祖父母の立場では幼稚園に来たことはあっても、祖父母世代として幼稚園での在園児や未就園児親子への実践をする側になったことは、初めてである。講座を通して、観察や実践で、子どもや親とのかかわりができ、親子のかかわる様子、子どものいろいろな姿や成長する姿に触れることができた。そして、それらについて話し合えたり、子育て支援について考えたりできた同世代のメンバーに出会えたことに喜びを感じている。祖父母世代として子どもとかかわると、様々な子どもの姿を面白いと捉えることができる。実践に対しても、子どもの様子によりいろいろなことが起こっても楽しいと感じられ、自分の子育てと重ね合わせられていく。そしてその思いは、祖父母世代という同世代の出会いにより分かり合え、受け入れ合えたことが大きな意味を持っていたのである。

インタビューの中で話が續くにつれ、祖父母世代の子育て支援活動への展開についての思いが語られていった。

「だから、寄り添うとか何とかというねんけど、寄り添う

ということ自体が、ね、言葉だけが走るけど、結局のところは、受け入れるんでは。 (中略) これ(受け入れること)やるの大変ですよ。(中略) そんな人は、世の中、なかなか少ないかわかれへん。しかし、一人でも二人でもおったら、やっぱりそういう人らが、発信になる以外ない、この国は。(中略) やっぱり、一人一人が、ね、自分自身、やってもしゃないやなんやじゃなくて、自分のやれる範囲内で」(2012年度)

受講することによって、直接的きっかけを生んだそれぞれの背景を、それぞれがしっかり実感し向き合うことによって、自分の中で温めてきた子育て支援活動へのつながりが見えてきた。これらを基に方向づけられた、子育て支援活動に携わりたいとの受講者の思いは、講座の中で親子世代への観察や実践、それらへの意見交換や振り返りなど、様々な取り組みがなされたことによる出会いがあったからこそである。

2011年度受講者は、講座終了後、受講者全員のグループで行う子育て支援活動の機会が提供された。受講によって得られたものを大切にしながら、現在、子育て支援グループとして、未就園児親子を対象とした子育て支援活動を続けている。

## 5. 親世代から見た祖父母世代との遊び

祖父母世代との遊びは、親世代にどのように受け取られていたのだろうか。2011年度、2012年度とも、「子育てひろばに」来園していた未就園児保護者に対して、祖父母世代とともに遊んだわらべ歌遊びと制作遊びについてのアンケートを実施している。アンケートは「まちの寺子屋師範塾」の最終日にあたる、遊びのコーナー(制作遊び)実践が行われた日に実施した。質問した内容は、祖父母世代と遊んだ感想、親子世代が望む遊びについてであった。回答者は43名(2011年度が20名、2012年度が23名)であった

### 祖父母世代との遊びの受けとめ

わらべうた遊びと制作遊びについて、参加した親子がどのように感じていたのかを示したものが表7である。両年度ともに、参加した親子のほぼ全員が「とても楽しめた」「楽しめた」と回答しており、祖父母世代の受講者が準備し、共に遊んだ活動が楽しく受けとめられていたことを示している。

自由記述に書かれた内容からは次のようなことが読み取れる。わらべうた遊びは、「知らない遊びを知ることができた」「遊んだことがないので楽しかった」など親子世代にとっては知らなかったり、あまり遊んだことのなかったりする遊びであったが、祖父母世代と一緒に遊んだことにより、「手をつないで遊ぶのが楽しい」「動きが楽しい」といった楽しさを感じていた。家庭ではあまりしていなかった遊びを、他の親子と一緒に親子で楽しめたことを喜んでいることがわかる。また、今回遊んだ



表7 遊びに対する受けとめ

わらべうた遊び	2011年度 (N=16)		2012年度 (N=10)	
	親	子	親	子
とても楽しめた	16	14	8	8
楽しめた	0	2	2	1
少し楽しめた	0	0	0	1
楽しめなかった	0	0	0	0

  

制作遊び	2011年度 (N=12)		2012年度 (N=17)	
	親	子	親	子
とても楽しめた	9	8	10	12
楽しめた	3	3	6	5
少し楽しめた	0	0	0	0
楽しめなかった	0	0	0	0

数値は人数（無答は除く）、回答者は遊びに参加した者のみ

わらべうたそのものを知らなくても、「手をつないで遊ぶのが懐かしい」「子どものころを懐かしく思った」など親世代は懐かしさを感じたことや、気に入った遊びを家で遊んだりしたことも記されていた。祖父母世代ならではの遊びの提供となっていたと考えられる。

制作遊びでは、「身近にあるもので簡単に作ることができるのが楽しい」との記述が多かった。さらに、作るだけでなく、「自分で作ったもので遊べることが楽しい」という記述もあり、祖父母世代の、自分で遊ぶものを作るという経験が生かされた遊びと言えるかもしれない。

#### 親世代が望む遊び

「今後まちの寺子屋師範塾でどのような遊びがしたいか」という質問で親子世代が祖父母世代に望む遊びについて自由記述を求めた回答からは、むかし遊びあるいは伝承遊びとの回答が最も多くあげられていた（回答のあった34名中15名）。それ以外にも、あやとり、お手玉、こま、わらべうた等具体的な遊びもあげられていた。このように、今回の経験から、祖父母世代が子どもの頃に遊んだような遊びを一緒にしてみたいという思いがあることがわかる。

## 6. 考察

本研究は、2008年度から2012年度まで兵庫教育大学で実施された「まちの寺子屋師範塾」を対象に、講座の観察記録や受講後のアンケート及びインタビューを通して、参加した祖父母世代にどのような意味を持っていたかを検討し、子どもをめぐる祖父母世代をつなぐ地域子育て支援のあり方について示唆を得ようとするものであった。

「まちの寺子屋師範塾」を受講した祖父母世代は、自身の子育てや仕事が一段落し、さらに自らの持てる力を発揮できる場所を探っている世代である。受講者は、そ

れぞれの背景から、漠然とではあるが子育て世代を何らかの形で助けたいという思いを持っており、今の子どもや子育て世代について学ぼうとしていたと考えられる。この思いがあったからこそ、本講座を受講し、子どもや子育て世代を理解しようと努めていった。観察や実践を通して、さらには、受講者同士の意見交換を通して、子育てに対する考えや子育て支援に対する理解を深め、その思いがさらに明確になっていったと思われる。受講後のアンケートやインタビューからも、参加した受講者は、実際に参加してよかったと感じており、さらに、この学びを地域の子育て支援活動に生かしていきたいという思いを強く抱いていることが明らかになった。

このような思いを強めていったことは、本講座の内容と深く関連していると思われる。「実践で学ぶ子育て支援」という本講座は、観察、実践、振り返りという3つの要素を含む世代間の交流を中心とするものであった。このような世代間交流は、具体的な事柄を通して、祖父母世代に多くの気付きをもたらしていた。子どもに対する気付き、子育て世代に対する気付き、さらには、子育てを支援することに対する気付きなどである。また、遊びの実践は、子どもや子育て世代に好意的に受け入れられており、それを感じた祖父母世代にとっても、未就園児親子と遊ぶ楽しさを感じるとともに、自分達が役に立てるという自信につながっていた。さらに、祖父母世代が、子育て中の親子にふれることで、笑顔をもらい自分も笑顔になる、パワーをもらえるといった声も聞くことができた。このような意味で、講座における世代間交流は、祖父母世代にとっても、子どもや子育て世代にとっても、参加する多世代に意味のある互恵的な交流となっていたと思われる。遊びの具体的な活動として、わらべうた遊びや紙とんぼ、ストロー飛行機等の制作活動がなされたことにも注目しておきたい。このような伝承遊びが、祖父母世代と子育て世代の親子をつなぐために有効に働いていたと考えられる。特に、わらべうた遊びは、心地よい世代間交流を生んでいたと思われる。

さらに、講座を通して、子育てについて本音で語り合え、わかりあえる同世代の仲間を得たことも大きい。このことは祖父母世代にとって大きな喜びであり、思いを同じくする仲間を得、子育て支援に向かおうとする強い後押しになったと考えられる。

以上のように、本講座の受講者は、講座を通して学び、気付き、思いを深めていったと言える。さらにこの中から、受講者グループで継続して子育て支援活動に取り組み、地域子育て支援につながっていくという発展も見られたことは、大きな成果と言えよう。

本講座の受講者の分析を通して、祖父母世代を地域の子育て支援活動につなげていくために重要なこととして、まず、きっかけとなる場の必要性があげられる。物理的

に同じ場所にいるだけではなく、つながりを感じられるようなきっかけづくりが必要であろう。そのひとつとして、本研究で取り上げた「まちの寺子屋師範塾」のような、実際に世代間交流を伴う子育て支援講座は、祖父母世代を子育て支援活動につなげていくために、意義深いものであると思われる。それとともに、祖父母世代をつなぐ役割が必要である。世代間の交流がそれぞれにとって意味のある互恵的なものとなるようにつなぐとともに、祖父母世代相互のつながりをも促し、さらには、子育て支援活動へとつなげていくという働きがその中に含まれていなければならない。

さらなる課題としては、継続性である。それは、かわりを継続するという工夫である。活動そのものは変化するものであっても、祖父母世代と子育て世代の良き関係性をできるだけ折にふれてつながりを持たせることである。それは、幼いころの様子があることによって思春期の子ども理解にもなり、地域で子どもの成長を見守っていくことにもなる。それこそが地域コミュニティであり、地域の教育力となっていくものである。そして、ここにも、それを調整するコーディネーターとしての人材が必要となるであろうし、その役割を持ったキーパーソンの存在が肝要であろう。

## 注

- 1) 観察記録とインタビューは、本研究の第3著者である大西もよによってなされたものである。第3著者は、2011年度は受講者として、2012年度は実践助手として「まちの寺子屋師範塾」に参加していた。

## 引用文献

- 樋口恵子（2006）祖母力 深水社
- 北村安樹子（2008）子育てをめぐる世代間関係―地域の  
子育て支援に関するシニア世代のアンケート調査より―  
ライフデザインレポート, 11-12月号, 24-31.
- 溝邊和成・吉津晶子（2014）保育士養成課程学生を対象  
としたクロストレーニング実習プログラムの修正―導  
入した高齢者向けネイチャーゲーム指導に見る学生の  
学び― 日本世代間交流学会誌, 4巻, 25-37.
- 内閣府（2010）子ども・子育てビジョン
- 名須川知子・上月素子・井上千晶・番匠明美・濱田格子・  
新道由記子（2014）世代間交流の活性化をめざした高  
齢者支援事業―子育て支援への参画を介して― 大阪  
ガスグループ福祉財団研究報告書, 27巻, 7-16.
- 名須川知子・新道由記子・濱田格子・井上千晶・番匠明  
美・上月素子（2011）世代間子育て支援に関する研究―  
祖父母世代の子育て支援調査 兵庫県子育て支援調査  
研究事業, 97-127.
- 大西もよ（2013）子育て支援における祖父母世代に関す

る研究―子育て支援者講座を通して― 兵庫教育大学  
大学院修士論文  
田淵恵（2008）地域の祖父母世代の子育て支援動機に関  
する質的研究 生老病死の行動科学, 13巻, 33-43.